第一五章　神界旅行の二（一五）

神界の旅行と思ったのは自分の間違いであったことを覚り、今度は心を改め、好奇心を戒め一直線に神界の旅路についた。

細い道路をただ一人、足をはやめて側眼もふらず、神言を唱えながら進み行く。そこへ※「幸」という二十才くらいの男と※「琴」という二十二才ばかりの女とが突然現われて、自分の後になり前になって跟いてくる。そのとき自分は非常に力を得たように思うた。

その女の方は今幽体となり、男の方はある由緒ある神社に、神官として仕えておる。その両人には※小松林、※正守という二柱の守護神が附随していた。そして小松林はある時期において、ある肉体とともに神界に働くことになられた。

細い道路はだんだん広くなって、そしてまた行くに従ってすぼんで細い道路になってきた。たとえば扇をひろげて天と天とを合せたようなものである。扇の骨のような道路は、幾条となく展開している。そのとき自分はどの道路を選んでよいか途方に暮れざるを得なかった。その道路は扇の骨と骨との隙間のように、両側には非常に深い溝渠が掘られてあった。

水は美しく、天は青く、非常に愉快であるが、さりとて少しも油断はできぬ。油断をすれば落ちこむ恐れがある。自分は高天原に行く道路は、平々担々たるものと思うていたのに、

※「幸」……聖師さまの実弟上田幸吉氏。後述の〝ある由緒ある神社〟とは、京都府中郡峰山町久次に鎮座する比沼麻奈井神社でご祭神は豊受大神。

※「琴」……亀岡市曽我部村中村に住む侠客多田亀の娘琴。後大阪に出て、若くして死亡。聖師さまはその中村の在所にある厚元禅寺に永代祭祀として多田親子の霊をお墓を建てて供養しておられます。

※小松林……みろくの神の別名で、素盞嗚尊の和魂・大八洲彦命の瑞霊が小松林命と顕現されて、聖師さまに帰神せられた。

※正守……穴太時代の聖師さまに力添えされた多田お琴さんの守護神さんのようですね。

かかる迷路と危険の多いのには驚かざるを得ない。その中でまず正中と思う小径を選んで進むことにした。

見渡すかぎり山もなく、何もない美しい平原である。その道路を行くと幾つともなく種々の橋が架けられてあった。中には荒廃した危ないものもある。そういうのに出会した時は、「天照大神」の御神名を唱えて、一足飛びに飛び越したこともあった。

そこへ突然として現われたのが白衣の男女である。見るまに白狐の姿に変ってしまった。「琴」と「幸」との二人は同じくついてきた。急いで行くと、突然また橋のあるところにきた。橋の袂から真黒な四足動物が四五頭現われて、いきなり自分を橋の下の深い川に放り込んでしまった。二人の連も、共に川に放りこまれた。

自分は道路の左側の溝を泳ぐなり、二人は道の右側の溝を泳いで、元の道路まできた。前の動物は追かけ来たり、また飛びつこうと狙うその時、たちまち※二匹の白狐が現われて動物を追い払った。三人はもとの扇形の処に帰り、衣服を乾かして休息した。その時非常なる大きな太陽が現われて、瞬くまに乾いてしまった。三人は思わず合掌して、「天照大神」の御名を唱えて感謝した。

今度は三人が各自異なる道路をとって進んだ。「幸」という男は左側の端を、「琴」という女は右側の道路をえらんだ。それはまさかの時、この路なれば一方が平原に続いているから、その方へ逃げるための用意であった。自分も中央の道路を避けて三ツばかり傍の道路

※二匹の白狐……ハッキリとはしませんが、どうも旭・高倉の明神つまり白狐神のようです。

を進んだ。依然として両側に溝がある。最前の失敗に懲りて、両側と前後に非常の注意を払って進んで行った。横にもまた沢山の溝があり、非常に堅固な石橋が架っていた。不思議にも今まで平原だと思っていたのに中途からそれが山になり、山また山に連なった場面に変っている。

そうして其の山は壁のように屹立し、鏡のように光っているのみならず、滑って足をかける余地がない。さりとて引き返すのは残念であると途方にくれ、ここに自分は疑いはじめた。これは高天原にゆく道路とは聞けど、或いは地獄への道路と間違ったのではあるまいかと。こう疑ってみると、どうしてよいか分らず、進退谷まり吐息をつきながら、「天照大神」の御名を唱え奉り、「惟神霊幸倍坐世」を三唱した。

不思議にもその山は、少しなだらかになって、自分は知らぬまに、山の中腹に達している。幹の周り一丈に余るような松や、杉や、桧の茂っている山道を、どんどん進んで登ると大きな瀑布に出会した。白竜が天に登るような形をしている。

ともかくもその滝で身を清めたいと、近よって裸になり滝に打たれてみた。たちまち自分の姿は瀑布のような大蛇になってしまった。自分はこんな姿になってしまったことを、非常に残念に思っていると、下の方から自分の名を大声に呼ぶものがある。姿は真黒な大蛇であって、顔は「琴」という女の顔であった。そして苦しそうに、のた打ちまわって暴れ狂うていた。よくよく見ると大きな目の玉は血走って巴形の血斑が両眼の白いところに現わ

れていた。自分は蛇体になりながら、女を哀れに思い救うてやりたいと考えていると、その山が急に大阪湾のような海に変ってしまった。そのうちに「琴」女の大蛇が火を吐きながら、非常な勢で、浪を起して海中に水音たてて飛び込んだ。自分は水を吐きながら、後を追いかけて同じく海に飛び入って救うてやろうとした。されど、あたかも十ノットの軍艦で、三十ノットの軍艦を追うように速力及ばぬところから、だんだんかけ離れて救うてやることができない。そのうちに黒い大蛇はまっしぐらに泳いで遥かあなたへ行って、黒い煙が立ったと思うと姿は消えてしまった。そうすると不思議にも海も山もなくなって、自分はまた元の扇の要の道に帰っていた。

今度は決心して一番細い道路を行くことにした。そこには人が五六十人と思うほど集まっている。見るに目の悪いもの、足の立たないもの、腹の痛むものや、種々の病人がいて何か一生懸命に祈っておる。

道路にふさがって何を拝んでおるかと思えば、非常に劫を経た古狸を人間が拝んでおる。その狸は大きな坊主に見せている。拝んでいるものは、現体を持った人間ばかりであった。しかし一人も病気にたいして何の効能もない。自分は狸坊主にむかって鎮魂の姿勢をとると、その姿は煙のごとく消えてしまい、すべての人は皆病が癒えた。芙蓉仙人に聞いてみれば、古狸の霊が、僧侶と現われて人を悩まし、そして自己を拝ましていたのであった。その狸の霊を逐い払ったとともに衆人が救われ、盲人は見え、跛は歩み、霊は畜生道

の仲間に入るのを助かったのである。

衆人は非常に感謝して泣いて喜び、とり縋って一歩も進ましてくれぬ。しかるに天の一方からは「進め、すすめ」との声が聞えるので、天の石笛を吹くと、何も彼も跡形もなく消えて、扇の紙のような広い平担なところに進んでいた。

（大正一〇・一〇・一八　旧九・一八　加藤明子録）